

御柱祭



二カ月に一度、近所の五軒が集まってモ工と言つのをやっている。モ工という言葉は鹿児島弁なのが入来弁なのか知らないが、講というよつなものだろうか。その都度場所代一人五百円、一軒五千円を積み立てる。年に一回旅行しようという訳である。会場は回り持ち、原則夫婦単位で、夕食後簡単なおつまみを用意して一杯やりながら世間話に花を咲かせ。但し政治活動を持ち込むことはご法度である。

先月は私の故郷が話題になった。県外の出身は私一人のこととて故郷信州諏訪の自慢話をする。来年は寅年、諏訪大社御柱祭の式年に当たる。七年目毎申年、寅年に行われるこの祭は、かつて小林秀雄をして「これぞ祭の中の祭」と唸らせたほどのものである。最近ではテレビでも放映されるが、ほんの一部でこの祭の規模はとても表現出来ていない。

「六年に一度の祭というのは、一度見ておきたいなあ」

と次回のお当番の旦那が言つ。

「ビデオがある筈だから次回までに取り寄せておきましょう」

私は五年前、母校諏訪二葉高校同窓会東京支部の役員をやっていて、総会のときビデオを放映することになり、地元の有線放送の会社LCVに三分ほどのものを編集してもらったことを思い出した。同窓会からダビングしてもらってもよいが、役員が代わっていることとて依頼するのも面倒と直接LCV社に電話してみた。以前の担当者が電話に出て、そのビデオのことを覚えていてくれた。「木遣り」のCDも作つたかどうかというので、それも一緒に送ってもらつたことにした。

諏訪神社は支社が全国に一万社もある日本一の神社で、鹿児島にも多くあり、入来にも四社あるという。武士の神として関東から下向してきた武士たちが伝えたものだ。週一回は夫と一杯やるのが習慣となつたわが家を建てた大工の棟梁は、入来町麓地区

の諏訪神社の氏子である。先日のだイヤメは早速届いたばかりのビデオの試写会となった。

御柱祭とは、上諏訪、下諏訪にある四社の諏訪大社それぞれの社の四隅に、計十六本の大木の柱を建て代えるお祭であり、諏訪郡一帯の大きな行事である。

夫は結婚した昭和三十一年に下社の「里曳き」を平成三年に上社の「建て御柱」を見ている。私は戦前に二回と戦後初めて女性も曳いた御柱祭も経験しているが、実家は諏訪市内なのでいずれも「里曳き」ばかりで、地元とはいえ全容は知らない。

ビデオは、祭の二年前から始まる「神木の見立ての神事から、お祭の前の様々な伝統の厳肅な神事を要領よく紹介している。そして私も見たことのない勇壮な「山出し」の祭を映し出す。四月初旬の寒風の中、柱の先頭に触覚のように延ばしたメドデコに鈴なりの男を乗せたまま川に突っ込む上社宮川の「川越し」。崖の上から、馬乗りになった男どもを左右に払い落とし、巻き込みながら滑り落ちる下社の「木落し」。どちらも八本づつ、三日ほどかけて

各担当の地区が趣向を凝らした演出で行われる。

それから一カ月後に行われる華麗な「里曳き」は、上下それぞれ三日間かけて社の四隅に全ての「建て御柱」を行って終了する。御柱街道には、作法どおり毛槍を振るう奴さんを従えた馬上の殿様スタイルの稚児さんの伝統の「騎馬行列」がゆっくり進む。

黒塗りの和傘をパツと開くと五色の紙吹雪がパツと散る草履取りの奴さんの仕種に、うっとり見とれていた幼い目を思い出す。その他、各地区の思い思いの飾りを付け揃いの衣装を着た男たちの長持ち行列が、手にした杖と足どりの所作も面白く、太い柄を調子よくギョギョと鳴らしながら行くのもちらりと映っていた。残念なのは、このビデオは事実の記録だけで、諏訪神社の歴史やお祭の起源が語られていないことだ。見知らぬ地への紹介には一寸不足だと思った。それでも

「これはすごい。皆に見せなくちゃあ。僕も是非とも来年は見に行きたい」

と大工さんは言う。どうやら来年は忙しい年になりそうである。